

『みんなの笑顔のために』

心のアンケート

令和5年度熊本県公立学校「心のアンケート～楽しい学校生活を送るために～」の調査結果をお知らせします。

「学校が楽しい」と回答した児童が昨年度より増加し、「いじめられたことがある」と回答した児童は昨年度より4.4ポイント減少しました。今後も、定期的に教育相談を実施し、いじめの未然防止と早期解決に向けての取組を継続して行ってまいります。課題として、「授業がよく分かる」と回答した児童が昨年度より減っていることがわかりました。児童の興味関心を高め、意欲的に取り組める授業を目指し、さらに授業改善の取組を進めていきます。「誰かの役に立っている」と回答した児童は昨年より増加していますが、「自信のあることや自慢できるものがある」と回答した児童は、わずかではありますが減少しています。自尊感情を高める取組を推進し、自己有用感を持ち、誰かのためにがんばることができる児童を育てていきたいと考えています。

学校でも、児童の小さなサインを見逃さないよう児童の様子に気を配り、定期的に教育相談を行っています。ご家庭でお子様の様子で何か気になることがありましたら、いつでも学校にご相談ください。

「いじめ」について考える ～私の生い立ちから～

私が幼い頃生活していた家はとても古く、わら屋根の上にトタンを被せたトタン屋根の家で、冬は木炭の掘りごたつを利用していました。3歳の頃のある冬の日、その掘りごたつで寝ていた私は、誤って火のついた木炭の上に落ちたそうです。そして大やけどをしました。今でもお尻と右足の一部にやけどの跡（ケロイド）と左の太ももに皮膚移植の跡が残っています。そのやけどが後々私の劣等感となっていったように思います。

小学校時代を思い起こしても、やけどのことをいつも気にしている自分がいました。やけどのことで友だちからばかにされるのではないかと不安な気持ちがあったのです。友だちと口論になったとき、わたしへのとどめの一言は「なんや、尻丸焼けが！」でした。何も言い返せなかったこと、言い過ぎたかもしれないととまどった友だちの表情を今でも覚えています。服を着ていれば自分にやけどの跡があるなど、外見ではだれにもわかりません。しかし、いつもそのことを気にしながら生活している自分がいました。小学校の修学旅行のことをよく覚えています。長崎の平和資料館に行った時のことです。原爆でやけどを負った人の写真が飾られており、みんなはそれらの写真を見ながら歩いています。私は、その写真ではなく、友だちの顔ばかり見ていました。友だちは「やけど」をどんな顔で見るのだろうという思いからです。被爆者の方を自分自身と重ねていたのです。私がそんな思いで、資料館の中を歩いているとは先生も含めてだれも気づいていなかったでしょう。

このように、私は人目をいつも気にしていて、人前に出るのがとても苦手でおとなしい子どもでした。小学校の入学式では、氏名点呼のとき、返事をして起立することができなかつたほどです。しかし、小学校高学年の頃、自分の考え方を換えようと思うようになったことを覚えています。「自分はやけどのことでだれにも迷惑をかけているわけではない。もっと堂々としよう。」と自分に言い聞かせるようになりました。このような経験があったからだと思います。私は、「本人ではどうすることもできないようなことで、その人をばかにしたり笑ったりすることは間違いだ。」そんな思いをみんなに伝えたい、それができるのは学校の先生ではないかと考えるようになりました。

人は、生まれてくるときに、男に生まれようとか、女に生まれようとか、どこに生まれようとか、誰一人として自分の意思で選択することはできません。このように人間の意志や努力ではどうすることもできない問題に理由のない理由をつけて、不当で理不尽な人間性を無視した行為、行動をすることが差別（いじめ）であり、絶対に許すことのできないものです。そんな差別に怒りを持ち、友だちの憂いに心を寄せることのできる「あたたかさ」を持った優しい菊水小学校の児童たちであってほしいと願っています。

